

⚓ 「私とドイツ」 ⚓

新潟日独協会の個人会員は100人を超える。なぜ会員になったのか。当たり前のことだが、人それぞれである。個性を大切にしてきたからこそ協会は長い歴史を刻んでいくことができたとも感じる。会員からドイツや協会との関わりで、自由に書いてもらった。



定着してきた「夏の学校」

—新潟大学工学部とマグデブルク大学との交流

佐藤 孝



1994年の夏に新潟大学工学部はドイツのオットー・フォン・ゲーリック大学マグデブルクと学部間の交流協定を締結した。そして、96年には学生交流を実質化するため、まずは夏の学校を交互に開催し、それを切っ掛けに更なる学生交流を進めることとなった。そしてその第1回を新大で開催した。夏の学校は、全て手探り状態でスタートした。予算の獲得、宿舎の手配、講師の手配、見学先の手配などを、工学部教授の私などのほか新たに募った工学部の国際交流担当教職員で手分けをして行った。

この頃、新大工学部から留学しようとする学生は、年に1名か2名、それも語学留学を希望する学生が主であり、夏の

学校は、工学部から留学する学生を増加させることが目的であった。ここでは、我々の夏の学校とその後増えることになった1年以内の短期交換留学、そしてこの交流を通じて活発になった新潟日独協会とドイツ側の独日協会ザクセン・アンハルトとの交流について振り返ってみたい。

夏の学校をスタートさせた時からの課題のひとつは、参加者の宿舎であった。新潟大学もそうだが、日本の大学には多人数の学生を宿泊させることができるゲストハウスは少ない。このことは、夏の学校の予算上の大きな課題であり、新潟で開催する夏の学校では、ホストファミリーをお願いすることとした。夏の学校



エルベ川とマグデブルク市

のプログラムは、午前中の日本語会話の授業、午後は大学の研究室や外部の施設の見学、日本を知ってもらうための観光地へのエクスカージョンなどであった。幸いにして、ホームステイ先を何とか集めることができたため、実施に必要な費用も節約でき、予算獲得に苦労しながらも何とか20年以上の間、夏の学校を継続している。

新大からドイツでの夏の学校に学生を派遣した際には、ドイツ語会話の授業と研究室や工場などの見学、文化施設見学が行われた。宿舎は大学内のゲストハウスを利用し、週末にホームステイが行われ、学生が単身で外国の家庭の中で週末を過ごすという経験をするということもあった。当初から、夏の学校の滞在費は、受け入れ大学が基本的には負担し、学生の負担は個人ベースのヨーロッパ旅行に比べると、50%から60%程度であったと思われる。それでも最初のうちは希望する学生がなかなか集まらなかった。近年では希望する学生が多くなり、選考をし

て人数を定員まで絞り込む必要が出るようになった。希望する学生が増えた原因は、先輩が参加し、良かったと言ってくれたからである。

当初は、「何故ドイツなのか？」という疑問を出されたこともあったが、結果としてはあるが、工学の分野で切磋琢磨する関係に両国があること、互いに母国語ではない国際語としての英語でコミュニケーションすることに十分意味があること、ドイツ人学生が英語のネイティブ学生よりもゆっくりと分かりやすい英語で日本人学生に接してくれていることで、日本人学生が自分の英語力に自信を持つことができるという効果があった。日本人学生達からは、「自分の話したいことの全てを話すことはできなかったが、それでも何とかコミュニケーションはできた」という感想が届いている。これは当初期待していたことではなかったが、近年話に聞くようになってきた、「国際語として英語を捉える考え方」に繋がるものと思っている。昔の英語学習



は、少しでもネイティブに近い発音・話し方を理想として追い求めていたが、最近では色々な国の人々とコミュニケーションできることが重要であると考えられている。その意味では、ドイツ人学生と英語でコミュニケーションすることは非常に良い経験である。もちろん、相手国の言語を学ぶことの大切さはある。その為、夏の学校では必ずホスト側の語学の授業時間を用意している。

学生の「短期交換留学」をサポートしてくれているのが、日本学生支援機構による奨学金である。この奨学金の制度にも色々と変遷はあるが、工学部として奨



マグデブルク大学の施設見学

学金の申請をし、採択されたプログラムで学生交流を継続している。これまでの交流実績は、1996年から2018年までの22年間で、夏の学校では派遣165名、受入167名となっている。また、短期の交換留学での学生数は、派遣52名、受入84名となっており、総計で450名を超えている。

学生が留学をするかどうか判断する際に、今一つ重要なのは、ロールモデルがいるかどうかである。つまり、留学してきている学生が同じ研究室や同じ授業にいるかどうか、それらの学生と友達にな

り話をしているかどうか、同じ研究室の先輩が留学してきてその話を後輩たちにしているかどうか、留学したことのある教員が積極的に学生に働きかけているかどうか、等々が重要である。その上で、留学することの重要性・必要性を学生が認識することで、留学するという判断がなされるように思われる。

上記のことの裏返しではあるが、留学の流れ、ロールモデルが一度途絶えると、復活するのは難しく、時間が掛かる。つまり、如何に学生の留学を継続的に行っていけるかが非常に重要である。私は、留学を希望する多くの学生と話し合う機会を持つことができた。その結果、留学して何を学ぶかについて、様々な形で学生と話し合うことができた。そして、兎に角行ってみるというのではなく、何か目的を持って行くパターンの学生を送り出すべく、学生を選んできたつもりであるが、評価は難しいところである。

ドイツの多くの大学では、半年程度のインターンシップまたは外国の大学での研究経験を学部卒業の必須要件としている。海外研究経験をインターンシップと同様に扱っていることは、海外での経験が非常に重要であると考えられている証拠であろう。学生の感想を聞くと、海外経験から大きなインパクトを受けており、更なる学習意欲の喚起につながっていることが分かり、海外経験の重要性は日本とドイツで共通であると思われる。短期の留学であってもさらなる長期の留学への意欲を喚起するとともに語学の必要性を再認識させることが分かり、奨学金の効果は、この「留学で何を学ぶか」について学生に考える機会を与えることであると考えている。

当初は2つの大学間の交流からスタートしたのだが、マグデブルク大学側の交流責任者であるヴィスヴェー教授が、独日協会ザクセン・アンハルトの会長になられたこともあり、新潟日独協会とも良い関係が結ばれている。ヴィスヴェー教授は、2016年度秋の外国人叙勲において、これまでの日独の交流への寄与に対して、旭日双光章を受けられている。15

年4月のマグデブルク大学長の新潟訪問にヴィスヴェー教授が同行された際には、新潟日独協会としても歓迎の会を催した。その際にヴィスヴェー教授は、大学発の姉妹都市の実現の可能性についても話題に上げられていた。これは、私の現時点での最大の夢でもある。皆様のご協力を頂ければ幸いである。

ドイツ旅行 —ヤパノロギーを抱いて—

小林 昌二



一、初めての海外旅行がドイツ

1991年の暮れに私は、「日本人のライフスタイル」を研究テーマとするドイツ・チュービンゲン大学ヤパノロギー学科を初めてお訪ねして以来、ドイツへは本年(2018)11月末からの旅で15回目となりました。

私は日本古代史の専門ですのでこれが韓国や中国であれば当たり前かもしれません。20代でアメリカ留学を勧誘されながらお断りし、また36歳で内地研修の機会を得て大いに満足し、希望者が殺到する海外研修に興味がなく、とくに欧米研修は縁もないと思うある種の「抵抗」族を自認しているかのようでした。それがなぜ48歳になって突然に欧米での研修を思い立ったのか、聊かの自省の念をもって書き留めておきたいと思った次第です。

二、ドイツ旅行へのきっかけ

契機は1990年晩秋に「沼垂城」の墨

書木簡が三島郡和島村に出土し、未発見で縁遠かった新潟県内の淳足・磐舟柵の研究が切実になったためでした。そんな地元・郷土史へのテーマが何で欧米へ、とりわけドイツへの旅を切実にしたのかを今は振り返って見たいと思うのです。日本古代の城柵研究をひろく世界との比較の中で位置づけたいという、48歳の年齢にありがちな「今一度」という願望が湧いてきたためでした。そんな私の思いに耳を傾け、ローマ帝国の辺境防備のリーメスの存在を語り、手を牽引してくれた恩人が当時同僚の小野昭さん(考古学旧石器時代)でした。

彼は著名なドイツのチュービンゲン大学考古学研究室で2年間を過ごしたそうですが、その小野さんは語学に堪能で私に見合った同大学のヤパノロギー学科主任教授クラウス・クラハットさん(日本近世史など)に、照会の手紙を書いてくれたのでした。これが私にとって後に引

けない中年になってからの海外研修志願の始まりとなりました。

前後しますが、私にはドイツ語能力はわずかな単語しか理解できない、あたかも3歳児以下（学生時代にドイツ語クラスに所属し、週3コマ、各110分で2年間、単位を落とすことなく修得）のようであり、また異文化社会での食生活やマナーの経験はゼロという、深刻な逡巡がありました。しかし小野さんはまあ、受け入れ先を訪問して、お願いしてくればいいじゃないですかと励まし、私を前に牽き出してくれたのでした。

三、ヤパノロギーからの「返信」を抱いて

「お待ちしています」との返信をもって出かけることになったドイツ旅行の計画中、そんな話を聞いてくれた県庁国際交流課にいた親友が、「俺もドイツには行ってみたいと思っていたところさ」と意気投合し、弥次喜多で行こうと、1991年12月に男二人の道行きとなったのです。

さてヤパノロギーには一人での訪問でした。「こんにちは」に迎えられ、主任教授の先生とのお話は、専ら頼みの日本語でした。そして当夜の大学院ゼミに参加しませんかとお誘いに乗り、分からないドイツ語を辛抱して悲観的になった頃、丁度ゼミは終わり、後は近くのギリシャ料理屋二階に場所を変え、一転、日本語でも語り合える和やかな小コンパになったのです。地中海小イワシの天ぷらでビールを飲んで小野さんの励ましの意味が分かった気持ちになり、帰路に夜空を仰いで「運命」を感じ入ったのでした。

気持ちは固まってもその後私費というわけにいかない私は、希望者の多い「長期・短期」の海外研修に志願者の一人と

なりました。「短期」といえども激戦で、案の定、以後3年・4年と経っても不採用でした。しかし5年目の1997年3月、54歳での採用の幸運が舞い込みました。年齢制限55歳の直前でした。

四、そしてその後

不採用の続く間に私の希望は膨み、イギリス北方のハドリアヌスやアントニウスの防塁調査が加わり、研修計画はイギリス3ヶ月・ドイツ2ヶ月の計5ヶ月になりましたが、幸いに認められるところとなったのです。

イギリスに続くドイツ滞在中に見学した、フランクフルト近郊タウヌス山中の古代ローマ兵営遺構ザールブルク遺跡には防塁や柵列が復元されていて、同じハドリアヌス時代のイギリスの石積みや煉瓦積みの防塁とは異なった木製の柵列でした。ゲルマンの豊かな森を感じさせ、日本の東北城柵の木製柵列の様態と同じだったことは大変に有意義で、さらなるメイン川、ドナウ川沿いのリーメス遺跡への踏査を誘うものとなって関心を高めるものとなりました。

これらは更に私の中国・韓国の古代城柵遺跡への関心につながり、隋・唐帝国辺境の古代日本を考える上で貴重な示唆を与えるものとなりました。例えば弥生時代の幾重にも環濠をめぐらした都市的な集落遺跡（クニ）と欧米のオッピデウムという環濠都市との対応関係とその鉄器の普及状況。発展したマウワー（市壁・シティウォール）に対して、なぜか弥生環濠を廃絶した古墳時代豪族居館や集落の違いは、国家成立過程の相違を形態的に見ているようでした。

そんな学術的な興味深さを思いつつ、他方風俗習慣ではとりわけエスリンゲン

の中世風クリスマス市の面白さに惹かれて、最近の新潟市の蒲原祭りの参考にな

りはしないかなどと余計なことに思いを巡らせたりする始末です。



チュービンゲン大学の日本学科ゼミ室で私（後列中央）の教え子らが茶話会で歓迎してくれた（2018年11月30日）

箏・尺八 デュオリサイタル ボックホルト氏と共に

箏奏者 杉浦 順子



秋のある日ふと顔を上げると日中友好条約 40 周年のニュースがテレビで報じられていました。

あれから 10 年が経ったのかしら…と私は二胡の音色に彩られた大連の美しい情景が甦ってきました。

「箏と二胡の合奏は出来ますか？」これが中国大連の日本領事館からの私への問いかけでした。

私はそれまで新潟での数回の箏ソロリサイタルのほか、2000 年にドイツ、05 年、及び 06 年に中国各都市をドイツ人外交

官で尺八奏者のヴォルフガング・ボックホルト氏と日本でも行った 2 回の「箏・尺八デュオリサイタル」を携えて日独両大使館他の主催で開催して参りました。

その大連での演奏を聞いて下さった領事館関係者が、今度は私の箏での日本音楽の紹介のほか、大連在住の二胡奏者との合奏で演奏会をしたら、より中国人に身近に感じてもらえる、日中平和友好条約 30 周年記念に相応しい催しが出るのではと計画し、この度の「杉浦順子・

牛麗麗 箏と二胡の調べ」記念演奏会の運びとなりました。

私はそれまで二胡の演奏会を聴いたことはありませんでしたが、合奏経験は皆無で、急いで情報収集をしたものの、良く分らないままプロ

グラムを考え、候補曲をあげ新たな楽譜を作るなどし（その時は本当に五線譜の有難みを感じました）、先ずは大連へと1週間ほど打ち合わせと練習に参りました。相手の二胡奏者は優秀な方でよく理解してくださり、音源交換とこの度の演奏会前1週間の練習期間、リハーサルを経て本番を迎えることになりました。領事館担当者との打ち合わせメールは百数十通に及びました。

お蔭様で「演奏会は大成功」と領事館大連所長はじめ関係者に仰っていただけました。「文化事業として今までに無い大盛会」と大連市政府、お客様にも大変喜んでいただきました。アンコール前に



CDの収録を前に記念写真に収まる2人

は、拙いながら私も中国語で挨拶し、2時間14曲が無事終わりました。演奏会の模様と私のインタビューは地元大連テレビでも放映され、新聞にも掲載されました。

いつも演奏会の後に流れ

る涙は、感動の喜びと、押し潰されそうな重圧からの開放感、そして手放すことの一抔の寂しさなど胸い交ざった気持ちからでしょうか。

好きな箏を通して日本国のお役に立てたこと、自身が得た喜び、深く生きた日々。大変しあわせな経験でした。大連で出会った人々の笑顔と共に、生涯忘れられない思い出、宝物となることでしょう。

どうしてこの様な演奏会に至ったのか。それは本当に稀有な縁、ストーリーは40年前に遡ります。

ヴォルフガング・ボックホルト氏は1976年から新潟大学大学院に留学し、以前より関心のあった日本音楽を学ぶた

め邦楽部に入部しました。丁度その年から私も音楽学校を卒業して邦楽部の指導に当たっており、よく学生の前で演奏を披露していました。

ある日、じっと熱心に聴いていた見慣れないスラリとした青年が私に声をかけてきました。若き日のボックホルト氏で彼はその時より、20年余りの歳月をかけて尺八を研鑽し、日本ドイツ間を往復し新潟をよく訪れ、箏との合奏練習をしていました。外交官となって在日本ドイツ大使館東京勤務を終える年には長年望んでいた私との箏・尺八デュオリサイタルをするまでになりました。

私たちの箏・尺八デュオリサイタルは日本国内、新潟、東京はもとより前出の2000年にアウクスブルク、ミュンヘン、ビーレフェルト、レムゴ、ドルトムントのドイツ5都市で、また05年及び06年には北京、上海、西安、大連、天津など中国各都市を日独中大使館他の主催で行い、その数は20数回に及びました。

ドイツ人外交官が係わった日本音楽演奏会は文化面だけに留まらず、外交面でも国際交流の異色の催しとして賞賛され、新聞、テレビ、ラジオなど日独中のマスメディアに取り上げられ紹介されました。東洋文化史博士でもあるボックホルト氏は日本文化をこよなく愛し、深い造詣、独自の感性と並々ならぬ情熱を持ち合わせています。私もその気持ちに応えたいと思いました。

西洋と東洋。ドイツと日本音楽の融合と発展、無限の美と可能性を求めてドイツ人である彼との間につくられる音楽世界「～揺れる魂～」は第1回デュオリサイタルと制作したCDのタイトルにもなっています。

デュオの主な公演

- 1995.12.17 新潟日独協会例会
- 1996. 2. 4 新大邦楽部 OB 演奏会
- 10.20 箏・四季の会演奏会
- 1997. 1.19 新春コンサート
- 5.17 NHK TV おはよう新潟
- 5.31 長岡日独協会
- 10.11 まなびピア新潟 '97
- 10.26 箏・四季の会演奏会
- 11.16 新潟県民芸術祭邦楽演奏会
- 1998. 3.22 OAG ドイツ東洋文化研究会
- 125周年記念式典
- 3.28 第1回のデュオリサイタルを新潟市で。7月には東京でも
- 6. 6 かがみの会
- 6.16 CD「～揺れる魂～」の収録
- 18日まで3日間
- 1999. 9.28 国際アロマニスト協会
- 2000. 4.26 初のドイツ公演をアウクスブルクで開始。ミュンヘン(4.28)ビーレフェルト (5.3) レムゴ (5.4) ドルトムント (5.6)
- 2005. 5.19 中国・北京で5回にわたり公演
- ～ 25
- 2006. 5.17 中国5都市(天津、北京、大連、
- ～ 31 西安、上海) 計8回
- 2008. 9. 6 日中友好条約締結30周年記念演奏会を大連で



中国公演でも息の合った演奏を続けた
(2006年5月24日、大連で)

歌、オートバイ、そしてラジオ講座

伊藤 聡



私は新潟県立リウマチセンターに勤務しているリウマチ医である。私が子供の頃、医師はドイツ語ができると言われていたようだ。ドイツでは医学が発達しており、日本はドイツから医学を学んだという歴史があったためだろう。また、かつては癌の患者さんに告知が行われなかったのが、医師が文法はまったくわからないがドイツ語を医学用語として使用した理由であったのではないだろうか。英語であると患者さんにわかってしまうのだ。

1979年に医学部に入学したが、第二外国語はドイツ語でもフランス語でもよい、ということになっていて驚いた。医師にとってドイツ語は必須のものではなかったのだ。ドイツ語については、「Der Hafen (新潟日独協会会報)」¹⁾にも書いたように、子供の頃テレビで見ていたアメリカの第二次大戦のヨーロッパ戦線を舞台としていた映画「コンバット！」のドイツ兵のドイツ語の響きになぜか憧れていた。

大学在学時以来、毎朝NHKのラジオドイツ語講座を聞いているが、2002年には憧れのドイツ短期留学を果たした。Publication listにNHKのラジオドイツ語講座があるのは私の誇りである²⁾。この原稿を書いているのは18年12月のクリスマスパーティー前の講演会で、「日本に生き残っている医学ドイツ語、日本語となったドイツ語について」の講演を

行ない、また同名の論文が、「新薬と臨牀」の12月号に発行された。

この論文で、私のドイツ語に間違いがないかについては、新潟日独協会の講演会に講師として来られたこともある筑波大学の相澤啓一先生にご高閲いただいた。大変感謝をしている。この、「新薬と臨牀」の原稿を書く際、「伊藤 聡 NHK ラジオドイツ語講座 おたよりのコーナー BRIEFTAUUBE 4月号」を引用したのだが、こういう医学雑誌に引用するには、正確な出版年、号、ページが必要なのである。しかし、私は自分の“おたより”のページのコピーしか保存しておらず、苦肉の策で、NHK出版にお尋ねの手紙を出した。するとなんと出版社の方がご丁寧に調べてくださり、正式な引用ができたのである²⁾。これにも大変感謝している。

私は現在ロックバンドを全国で4つ掛け持ちしているのだが、筑波大学にいるときに、ラジオのNHKドイツ語会話で、ドイツ語で聞くロックというコーナーがあった。ビートルズの「シーラブズユー」や「抱きしめたい」が紹介されていた。ビートルズはデビュー当時ハンブルクで演奏をしていたのである。これらの歌詞はインターネットで比較的簡単に入手できたのであるが、テンプテーションズが、十八番の「マイガール (My girl)」をドイツ語で歌った「マインガール (Mein

Girl)」の歌詞は入手できなかった。

そこからが私のしつこいところで、この時もNHK出版に手紙を書いて、何とか歌詞カードを入手できないでしょうか?と依頼したところ、何とか放送を担当していたドイツ人の先生から、Viel Spaß(楽しんでね)と、歌詞カードが郵送されてきて感激した。これらの曲を早速練習し、筑波大学の、ドイツ語とドイツ文化を愛する者の会、「ドナウの会」で演奏した。参加していたドイツ人の先生からは、発音が非常によかったとお褒めの言葉をいただいた。新潟市内のホテルで行われた新潟日独協会のクリスマスパーティーで演奏したが、この時は1階下の部屋で某科の医師達の研究会が行われており、音量が大きすぎるとクレームが来て、以後出入り禁止になりそうになり動揺した。

私は高校1年生のダックスホンダに始まり、バイクを乗り継いでいるのだが、250ccのバイクで後輩の750ccのバイクとツーリングに行ったところ、あまりのパワーの違いに愕然とし、39才で大型

免許をとった。子供の頃向かいのおじさんが乗っていたカワサキのW1に憧れていたのだが、その復刻版のW650が出たので、それにしようとバイク屋に行ったものの、すでに私の体は巨大化していて、W650にまたがったがホンダのカブに乗ったような感覚だった。そこでセールスが上手なバイク屋のお兄さんが、「伊藤さんのガタイならこれでしょう」とBMWの1000ccを持ってきて、即断即決で購入した。

ところが、どれだけ出足が早いのかと期待していたのだが、むしろ教習所のホンダの750ccの方の出足がよかったのだ。しかしBMWのバイクの真価は長距離ツーリングで体感することができた。長距離を走ってもまったく疲れのないのだ。また、カウリングが完璧であるため、高速で走っていると、雨が降ってきても体には当たらず、ヘルメットにカンカンと雨が当たるので、雨が降ってきたことに気づく、という状態なのである。数年前新潟からのフェリーにのり、北海道1周を果たし、来年も北海道に行



愛車のBMW1200CCにまたがる筆者

く予定である。しかし先日松島までツーリングに行ったところ、ヘッドライトがつかなくなってしまった。幸い明るいうちに新潟に到着しバイク屋に入院させたのだが、前輪のサスペンションのコンピュータシステムの取り換えが必要とのことで、何と21万円かかった。おとなのおもちゃは高いのである。

日独協会のご縁で、マグデブルク大生のホストを務めさせていただいている。ドイツの学生さんは礼儀正しく、時間厳守なので、本当に楽しくお世話ができています。02年には、我が家に滞在したマグデブルク大生を訪ねてマグデブルクま

で行き、アパートに泊めていただいた。いい思い出である。ドイツ語はなかなか上達しないが、今でも毎朝7:00からラジオでドイツ語を聞き、勉強している。私はアメリカリウマチ学会で英語で招待講演をしたのだが、今度はドイツリウマチ学会でドイツ語で講演をするのが夢である。

引用文献

- 1) 伊藤聡「私とドイツ、ドイツ語 Der Hafen (新潟日独協会会報) 第3号」2013.12
- 2) 伊藤聡「NHKラジオドイツ語講座 おたよりのコーナー BRIEFTAUBE P121, 4月号」2003

クランケはドイツ語？

私が書いた「新薬と臨牀」に記載した内容のうち、主なものを紹介する。「生き残っているドイツ語」ということが、医学界の変化を表していて興味深い。

「カルテ:Karte」は日常的に使用されておりすでに日本語になったと言っても過言ではないだろう。「ノイローゼ:Neurose」も英語ではneurosisである。「ヒステリー:Hysterie」もすでに日本語として医療関係者以外でも使用されている。「オブラート:Oblate」がドイツ語であるというのは、筆者も今回の調査で初めて認識した。英語では、eatable paperと言うらしい。「ケロイド:Keloid」「チアノーゼ:Zyanose」「レントゲン:Röntgen」「ワセリン:Vaselin」などもよく使用される。

次は非常に重要なのであるが、アメリカ人と会話をしていて、通じない言葉がある。「ナトリウム:Natrium」と「カリウム:Kalium」である。これらはドイツ語なので、それぞれsodium、potassiumと言わないと英語圏では全く通じない。実験器具などでは、「シャーレ:Schale」「メスシリンダー:Messzylinder」「プレパラート:Präparat」「ペーハー:Ph」「ストリッヒ:Strich」など、多数ある。米国留学中に、実験室でシャーレと言って通じなかったのを思い出す。Plateなのである。

今回の原稿を執筆するまで、私が正しいドイツ語と信じて疑わなかったのが、「患者:クランケ、Kranke」である。最近はあまり使用されなくなったが、医療界で使用されているドイツ語としてはかなりポピュラーなものであろう。原稿をチェックしていただいた相澤啓一先生から、Krankeは「病的である」という形容詞krankを名詞化した表現から定冠詞が省かれた形だが、普通「患者」という名詞は、Patient(パチエント)であるのご指摘をいただいた。ということで、皆さまにも是非「新薬と臨牀」の、「日本に生き残っている医学ドイツ語、日本語となったドイツ語について」を読んでいただきたい。

入会したころのこと

桑原 ヒサ子



正確な西暦は思い出せないが、新潟日独協会に入会したのは、私が現在の勤務校である敬和学園大学に着任した前後だったと思うので、もう28年くらい前のことになる。きっかけは、新潟市の老舗和菓子本舗丸屋本店の当時の社長、本間彊氏との出会いだった。

ドイツ語の通訳を探していた本間さんから突然電話を頂いた。新潟大学医療技術短期大学部（当時）でドイツ語を教えていた真壁伍郎先生から紹介されたとのことだった。本間さんはフレンドシップ・フォースの活動に深くかかわっておられて、ちょうど新潟で受け入れていたドイツ人一行が帰国するのと一緒に、今度は新潟のホストファミリーからドイツを目指す人々が集まるセレモニーを仕切っておられた。新潟市内のホテルの大広間にはドイツ人と日本人が百人ほど集まっていたように記憶している。

私の仕事は、開会式でドイツ人代表者のスピーチを日本語に、日本人代表者のスピーチをドイツ語に通訳することだったが、これは事前にスピーチ原稿を手渡されていたので問題はなかった。開会式が終わると、大広間のいたるところで別れの言葉が交わされていて、四方八方から伸びてくる腕に引っ張られ、通訳を求められた。本当に「引っ張りだこ」で、夏場でクーラーが効いていたにもかかわらず汗だくになってしまったことを覚え

ている。

新潟から初めてドイツへ息子さんや娘さんを送るご両親はとてご心配の様子で、今度はホストファミリーとなるドイツ人に「よろしく頼みます」と伝えてほしいと何度も依頼され、一方、ドイツ人たちはドイツ人たちで、日本を去る前の最後の機会に感謝を表現しようとした。彼らが、新潟で気持ちのいい体験をしたことがストレートで伝わってきた。本間さんは、こうした有意義な国際交流事業に尽力されていた。

今でこそ日本でも企業が意義ある研究に研究費を提供し、さまざまな文化行事に寄付することが定着してきたが、当時はまだ欧米企業の価値観とは異なり、企業の社会貢献はまだまだった。そんな中、本間さんは社長として多忙であるにもかかわらず、先頭に立って新潟市における国際交流の推進と活動に専心されていた。その姿勢に深く感心したことが思い出される。

その本間さんは、新潟日独協会の理事としても積極的に会の運営に携わっておられた。それで、私もお誘いを受けて夫婦一緒に会員となり、二人とも理事として迎えられた。しかし、しばらくすると本間さんは、兄弟分（とはご本人の言）の新潟眼鏡院社長の上田茂氏に事務局長として新潟日独協会を盛り上げてもらい、ご自身は新潟日仏協会に力を注ぎた

いと話しておられた。実際その後、日仏協会の中で大きな働きをされることになる。頂くお年賀状にはナントを始め、毎

年訪問されるフランスの諸都市の写真が印刷されていた。そして、新潟日独協会は、上田茂事務局長の時代を迎える。

韓国通がなんで

桑原 孝志



ある日、突然、青柳正俊事務局長から携帯に電話がかかってきた。青柳さんは、私の県庁勤務時代、国際交流課でご一緒したことがあり旧知の仲である。「お願いがあるので、会ってほしい」とのことだったので新潟駅前のファミレスで待ち合わせた。青柳さんのほかに当時の皆川信子会長が来ておられて初対面の挨拶を交わした。

依頼の趣旨は「新潟日独協会に加入してほしい。加入の上は副会長に就任してほしい」というものだった。

突然の申し出に面食らった。県庁時代の仕事柄、韓国・朝鮮とは関係が深かったので、そちらの、例えば日韓親善協会あたりからのお誘いなら話は分かるが、ドイツ関連での勧誘というのは思ってもみなかった。私は、ヨーロッパには数回出かけているが、行った先はイギリス、フランス、ベルギー、デンマーク、オランダそしてチェコ、トルコであって、見事にドイツ・オーストリアを外している。ドイツオペラは好きだけれど、どちらかといえばイタリアオペラに心ひかれる。文学、美術関連でもドイツ系にはまるであろう。ゲーテもトーマスマンも作家の名前は知っていても作品は読んだことがない。大学の第二外国語はドイツ語では

なく、フランス語だった。要するにドイツとの関係はこれまで全くといっていいほどないのである。ただ、新しいことには何でも首を突っ込みたくなるクチなので、会員になることには同意したが、副会長とはなんほ何でもおこがましい、それは遠慮したい、とお断り申し上げた。なのに、皆川会長と青柳氏は許してくれない。「桑原さんがドイツと関わりがないことは分かった。それでも何が何でも副会長を引き受けてほしい」と再三の説得である。とうとう根負けして副会長職就任を了承してしまった。

引き受けてはみたものの、やっぱりドイツに関する知識のなさは如何ともしがたい。活発なアイデアが飛び交う役員会などではロクに意見も言えず、ずいぶん肩身の狭い思いをした。しかし、「新潟日独協会は、ドイツとは何の関わりを持たずとも会員になることができ、役員にもなれてしまうという実に懐の深い団体である」と思うことにして自分を納得させた。年間行事の立案やイベントの運営にはちっともお役に立てなかったものの、例会や懇親会の挨拶要員としてはなんとか職責を果たし（たと思う）、先頃、持病の難聴の悪化に伴い役職を解いていただいた。



リュースハイムの丘からライン川を望む

2018年秋、格安のドイツ・パッケージツアーに参加した。新潟空港を発って、上海を経由してフランクフルトに至り、ケルン、ライン川近辺を周遊するプランである。5日間の日程のうちドイツ滞在は丸2日であとは飛行機に乗っているだけの弾丸ツアーだが、とにかくドイツの空気に触れることができた。これまでドイツとは無縁だったが、これで何とか少しでも関わりができて日独協会員らしくなったというものだ。

団体旅行の自由時間、フランクフルト・レーマー広場の露天カフェで白ワインのグラスを片手に、行き交う観光客を独りぼうっと眺めた。宿泊先の安ホテル

のバーには二晩続けて出かけ、ポーランドからの出稼ぎだというバーテンダーとブローケン英語で会話を交わしつつ、白ワインをひっかけた。私はもともと赤ワイン党だったのだが、たったこれだけの経験で日本に帰ってから白ワイン党に宗旨替えしてしまったのである。我ながら節操のない話だが、ドイツ白ワインにやられちゃったのだ。

以来、夜、白ワインをチビリチビリとなめながら西洋歴史ドラマなどを視聴するのが至福の時間なのだが、懐具合の関係から買ってくるのはほとんどチリワインで、ドイツワインになかなか手が出ないのには情けない思いでいる。



金融・証券界の小僧の神様

— ドイツ連邦銀行の伝統と中央銀行の独立性 —

江畑 徹



私は過去2回にわたって、新潟日独協会会報『Hafen』にドイツの財政、金融について寄稿した。2013年10月6日号に「ドイツ経済と日本経済」、2014年4月7日号に「ECB（欧州中央銀行）理事・ドイツ連銀総裁、イェンス・バイトマン」というものである。前者は、第二次大戦後、急速な復興と高度成長で並称されていた（西）ドイツ経済と日本経済が現在対極的と言っているほどの懸隔を見せているという内容である。後者はドイツ連銀総裁にしてECB（欧州中央銀行。以下ECB）理事のイェンス・バイトマンは世界の金融政策の潮流（現在では非伝統的金融政策と総称）に真っ向から反する主張で孤軍奮闘しているとして、最後を「バイトマン頑張れ!!」と締めた。

ドイツ連銀は私にとって畏敬の対象である。

私は1980年に証券会社に入社し、以来2002年に退社するまで22年間一貫して営業畑で活動した。すなわち、証券・金融市場の只中で職業人生を送った。

1987年10月、私は世界の金融証券界の底辺で丁稚小僧のようにして駆けずり回っていた。その時起こったブラックマンデーは忘れられない出来事の一つである。

1日の値下がりでは1929年世界大恐慌のブラックサザデーを上回る金融市場史屈指の大暴落である。まずNY市場でダウ平均が1日で2,247ドルから508

ドル（22.6%）下落し1,936ドルまで下げた。翌東京市場では日経平均25,746円から3,836円（14.9%）下落し21,910円となった。今日の水準でいえば、NY市場では1日で約5,700ドル、25,000ドルから19,300ドルまで下がることになる。東京市場では22,000円から3,200円下がり、18,800円まで下落することになる。

このような暴落が何故起きたのか？複合的な要因がからむとはいえ、直接のきっかけは西ドイツ連銀が金利を引き上げたことである。当時アメリカはドル安と不況に悩み、日本と西ドイツに金利引き下げと内需拡大を要請していた。そのような中で、西ドイツ連銀（当時。以下、「西」は略）は金利を下げないどころか、逆に引き上げたのである。カール・オットー・ペール総裁の時代である。金融市場はこれを国際協調の乱れととった。

ドイツ連銀の問答無用といわんばかりの金利引き上げは、ドイツ連銀にとってはまさに「問答の必要はないでしょう」ということであつたのであろう。「われわれドイツ連銀はドイツの中央銀行であり、その存在規定はドイツマルクの通貨価値を守ることにあります。そのことは国際社会の皆さんも先刻ご存知のはず。そのわれわれがドイツ国内でインフレ（物＝財貨に対する通貨価値の下落）の予兆を感知したので、予防的に金利を引き上げました。それ以上でもそれ以下で

もありません。とりたてて説明の必要はないかと思えます」西ドイツ連銀としては、こんな感じであったのではないか。私自身、証券営業マンとして、この大暴落では大変な辛酸を舐めた。一見もっともらしいが、そうした個人的な苦や快・不快・欲得・損得とは別に、私は「西ドイツ連銀、畏るべし。」と震撼し畏怖し、更に畏敬の念を持った。

「これこそ中央銀行。The Central Bank.」と思ったのはこの時である。私は志賀直哉の小説の題名『小僧の神様』を思い浮かべてしまう。ドイツ連銀は世界金融・証券界の底辺で働く小僧にとって中央銀行の神様に思えたのである。この時以来、私にとって中央銀行の真の姿とは、日銀でもないしFRB（アメリカの中央銀行）でもない。ドイツ連銀であり続けている。

中央銀行の独立性問題に関し、現在の日本およびアメリカでは、ドイツ連銀のこのようなスタンスに異論が多いだろう。この時のドイツ連銀は、アメリカの要請であり懇願であり脅迫といってもいい「日本、ドイツは金利引き下げせよ」に対するドイツ政府の意向とは無関係に動いたと思われる。現在支配的な考えは中央銀行の独立性といっても、中央銀行も政府機関なのだから中央銀行の金融政策も政府（行政権・執行権）の意向に沿ったものでなければならない、というものである。

しかし、それでは中央銀行の独立性について考えたときさえいえない。金融の元締め機能に関しては、そう一筋縄ではいかない。貨幣というものの根源、貨幣発行権＝シニョレッジ＝領主特権に関わる深い問題をはらんでいる。坂本龍馬が、

銀座（貨幣発行権）を江戸から京都に移しさえすれば、將軍職（執行権）はそのままでも恐れるに足りずと言ったというエピソードがあるそうである。

ドイツ連銀の、世界に君臨するアメリカの意向を平然とはねつけるこの強さはどこから来たのか、歴史を辿ってみよう。（因みに、当時日銀は金利を引き下げ続け超低金利を継続し続けバブルの生成とその後の崩壊を招いた）

まず第一は第一次大戦後のハイパーインフレ。これとその収束で得られた教訓は資産に見合っていない貨幣発行をおこなってはならないということであった。第二の歴史的経験として、ヒトラーが、事実上、軍備増強資金に中央銀行引き受けによる国債発行となるような仕組みを要請していたが、ドイツ帝国銀行（ライヒスバンク）はこれを拒否、当時の理事全員免職となった。この時の企画担当理事がウィルヘルム・フォッケである。彼が副総裁、総裁として基礎を築き上げたのが戦後の（西）ドイツ連邦銀行（ブンデスバンク）である。

第一次大戦敗後の過酷な状況にさらに追い打ちをかけた貨幣価値1兆分の1以下に下落（物価は上昇）するハイパーインフレとそれを終息に導いた経験。最凶の独裁者ヒトラーへの拒否。こうした厳しい歴史の中でドイツ連銀はその強靭さを身に着け、伝統とした。それゆえにこそ、ドイツ連銀はドイツ国民の信頼を得ている。私にとってドイツ連銀は中央銀行の理想の姿であり、神である。しかし、それは連銀一個で成り立っているのではない。国民の信頼とともに成り立っている。信用という言葉は金融と同義で使われる。たとえば、「信用供与」。一方、一

般には国民にとってドイツ連銀のような基本引き締め気味な金融政策は好まれない。通常人は金融は緩く、お金はだぶついている方が好みである。ドイツ人として本来そうであろう。しかし、そうではあっても彼らはドイツ連銀を信用、信頼している。

来年（2019）10月、ECB 総裁の任期が切れる。次期総裁の下馬評筆頭にイェンス・バイトマンの名が上がる。しかし、ドイツ政府はECB 総裁よりEU 委員長の椅子の方を優先させるという声も聞こえる。そうした下世話な観測は置くとしよう。バイトマンがECB 総裁になった

場合、ドイツ国民とドイツ連銀の関係なら有効な金融政策も、ヨーロッパ全域が対象な場合、非常な軋みが生ずる可能性がある。そこが新たな試練の乗り越えどころとなろう。

私がドイツを好きになったきっかけは、幼少期単に「ドイツ」という音の響きが気に入ったからに過ぎない。しかしその後人生を経るに従い、いろいろな面でドイツを知るに従いどんどんドイツが好きになる。職業面で遭遇したドイツ（ドイツ連銀）は小僧の神様とまでなった。

老後はビール大国に移住？

和田 直樹



私とドイツとのかかわりについて、新潟日独協会創立40周年の節目に整理したいと思います。その前に、私はビールが大好きです。実は、ドイツの法律「ビール純粋令」（1516年）の制定日は、私の誕生日と同じ4月23日なのです！これも何かの縁ですね！

高校2年生のころ、私はクラシック音楽に興味を持ち始め、吹奏楽部に所属していました。ワーグナーやマーラー、カラヤン、ベルリンフィル、ウィーンフィルといったドイツ系のクラシック音楽を聞き始めた頃でした。そのころは、NHK教育テレビで「ドイツ語会話」が放送されていて、ドイツ語を勉強してみようかなあくらいの気持ちで見始めました。出演は、女優の松下恵さんでした。

この年度の放送が私の一番お気に入りです。

ちなみに、同じきっかけで「イタリア語会話」も見始めています。こちらの出演は、あの！パンツェッタ・ジローラモさんと山口もえさんでした。某CMでブレイクする前の山口さんで、私はこの頃からの大ファンなのです。

2002年に大学に入学してからは、迷わず第一言語にドイツ語を選択しました。（ちなみに、いわゆる教養科目では、他学部のドイツ語の先生や学生と一緒に、4年間イタリア語も選択していました。）そして03年の8月、ドイツ・ボン大学のサマースクールに参加し、これが初めての海外旅行、初めてのドイツ訪問でした。

寮に住み、電車で大学に通い、週末はホームステイをするなど、1ヶ月と短かったですが、充実した時間を過ごしました。最後の1週間は、チェコやオーストリアにも足を運び、少しだけチェコ語を勉強し、今でもいくつかのフレーズを忘れずに覚えているのが、ちょっとした自慢です。

ただ…この期間中、現地の人々から(私の幼稚なドイツ語を見かねて)「英語で話してくれ」と何度も言われたのを、「ドイツ語の勉強に来ているんだ」とかたくなに拒み続けるという大失敗をしてしまいました。外国人と交流するというのもひとつの目的だったと考えれば、もっと柔軟に考えればよかったなと大いに反省し、今でも教訓にしています。

そんな中、当時知り合ったドイツの方や他国からの留学生と、10年以上経った今でも SNS (インターネット) で連絡が取りあえることは、時代が進んでいるなあと感じながら、失敗の中にも少しは収穫があったのかなと思っています。

しばらく期間が空き、10年に新婚旅行で再びドイツを訪れました。このときは、イタリア～オーストリア～ドイツ南部と、ツアーなし・ガイドなしの完全個人旅行で電車の旅をしました。オーストリアは、経由だけですが、冬季五輪のインスブルックに入り、なんとかザッハートルテを食べることができました。

ドイツでは、ミュンヘン・ニュルンベルク・ハイデルベルク・フランクフルトなどを訪れました。ニュルンベルク以外は、03年に訪問済みで2回目でしたが、今回は冬に訪れたので、夏と冬二つの季節を味わうことができました。(さすがに、初めてのニュルンベルクが日曜日で、

開いているレストランがなかなか見つからなかったときは焦りましたが…)

また、このときは、当協会顧問で大学の部活の大先輩でもあるボックホルトさんのご自宅(離れ)に泊めていただきました。ノイシュヴァンシュタイン城にも連れて行っていただいたり、アウクスブルクのフッゲライなども案内していただきました。

私は、連れて行っていただいたヴィース教会がお気に入り、パソコンなどではその写真をよく使っています。

フランクフルトでは、最も老舗のレストランを再び訪れ、ソーセージとアプフェルヴァインを楽しみました。そして、日本でも人気の NICI (ニキ) という動物のぬいぐるみの直営店で、大袋バーゲン品をどっさり買い込んだのは楽しい思い出です。ちなみにその時買ったペンケースは今でも大切に使っています。

そしてまた年月が過ぎ、ドイツとのつながりを持ち続けたいなあと思っているうちに、13年に長岡日独協会、14年に新潟日独協会に出会いました。当初は、私の住まいに近い長岡の方に参加しながら、ときどき新潟にも参加していました。しかし、体力的な問題や職場との距離から、あるいは同世代の会員が身近にいたことから、新潟日独協会に徐々に比重が移ってきました。

長岡は、市がトリアー市と姉妹都市になっていて、ドイツに高校生を派遣するプログラムなどもあり、市民レベルでの交流が盛んです。協会という形では私は力になれませんでした。一市民・一県民として、長岡とドイツとの交流を応援していきたいと思っています。

2015年に若手の会が発足し、2017年

には若手メンバーとして協会の理事に就任しました。若手の会の取り組みについては、青年部（若手の会）の紹介ページで、若手代表としての挨拶文を寄稿させていただきました。

振り返ると、やっぱりまたドイツに行きたい！と改めて思います。妻とは、「老後はドイツに移住！」とか話してみたり、小さい子供たちは、外国語が聞こえると真っ先に「これドイツ語？」と聞いてくるようになりました（たいていそれは英

語ですが…）。

それはともかく、まだドイツ北部には行ったことがないですし、オクトーバーフェストも行ったことがありません。一番行きたいのは、なんと言ってもクリスマスマーケットです！想像したらキリがありません。いつかまたドイツに行ける日が来ることを願って、これからも新潟日独協会の活動に参加していきたいと思います。

私の協会とのつきあい

青柳 正俊



私が新潟日独協会とつきあい始めたのは、協会40年の歴史のなかのちょうどその中間あたり、ということになります。

2年間のドイツでの生活を終えて新潟にかえってきたのは1994年でした。「そうですか、ミュンヘンに2年間いたんですか、じゃあ英語がペラペラになったでしょう」とある方に言われてガックリしたことを覚えています。帰国後の業務はドイツと接点がなく、ドイツのこともドイツ語もこのまま忘れたくない、と考えていたところ、それからしばらくして新潟日独協会のことを知りました。そして、協会のセミナーに参加しました。当時は毎月のようにセミナーを開催していた、と記憶しています。ただ、私が参加したのはせいぜい数回だけでした。しばらくはまた、自分で自分の時間の管理さえできない日々の仕事に埋没していくことに

なりました。

そのあとは、それでも新潟、長岡という県内2つの日独協会との縁を少しずつ深め、時期によってどちらかの協会に重きを置きながら、ドイツとのかかわりを保ってきました。長岡では、2008年から5年間、市民向けドイツ語講座の講師をつとめたのが印象に残っています。学ぶことはあっても、人に教えることなどそれまで経験もなく、最初は随分と緊張したものでした。また、学生の兄弟や、子連れの主婦、定年後の紳士など、それぞれの環境・生活のなかから時間を作って、目的を持ってドイツ語を学ぼうとしている参加者の方々に接するなかで、私としても随分大きな刺激を受けました。

2008年5月、G8労働大臣会合が新潟・朱鷺メッセでありました。この時に縁のあった駐日ドイツ大使館の方のはからい

で、翌年1月、大使館のロビーで「新潟フェア」を開催し、私が段取りしました。新潟の小田良彦会長、長岡の芳野昇理事長の御両方がお忙しいなかレセプションにおいでくださいました。これもよい思い出です。そして、私の新潟日独協会とのつきあいに関しても一つの節目であった、と振り返って感じます。

そのころ、新潟の協会では年2回の例会が活動の主体となっていました。職場の行事とはまったく異なる雰囲気、当時の私には一種のサロンでの集まりのように感じ、例会の時期が近づくと参加するのを待ち遠しく思っていました。

やがて、当時この会を切り盛りしていた上田茂事務局長が、協会のこれからの事務局体制をどうするかについて検討されていることを知りました。私としては、日常とは別世界の方々と楽しく会話ができ、そしてたくさんのことを学ぶことができるこの会が、このまま終わりにってしまうのはとても残念、と感じました。新潟日独協会をなくしたくない、とその一心で、長いあいだの逡巡のすえ事務局長に就くことを決め、そして今日に至っています。

2013年からの新体制では、一言でいえば、とにかくドイツに関心のある人たちが入りやすい会にしよう、敷居を低くしよう、ということを目指しました。協会の進め方に関しては、たくさんの方々からご助言・ご尽力をいただきました。最初のころにある先輩からいただいた、「こういう会は、何であれ忙しい人にこそ頼みごとをしないとうまくいかないんだよ」というアドバイスを守ってきたつもりです。とはいえ、あまりにも拙いやり方で皆様に多大なご迷惑をおかけして

きたものと思います。職場の飲み会の幹事さえできるだけ避けていた私が、しかも何かのたびに長岡から出ていく、というのでは、事務局体制の非力は明らかです。

それでも、協会に親しんでもらう窓口をたくさんつくろう、ということで、事業・イベントをたくさん設けました。実力以上に試みてしまったところがあり、現在に至るまで試行錯誤を繰り返してきました。看板事業として定着したもの、最初はうまくいかなかった事業がその後の工夫で軌道にのったもの、さらには新しい事業、と、役員をはじめとした多くの方々の率先ご協力でここまで進めていくことができました。お一人お一人のお名前を挙げればきりがありません。この機会に改めて感謝を申し上げたいと思います。

ところで、長岡日独協会は昨年度末を以て活動を終えました。県内の日独協会は、今では新潟が唯一です。記念誌に似つかわしい威勢のよい話ではなくて申し訳ありませんが、この協会の存続と発展に向けて、より確かな体制づくりと新しい仲間づくりへのご協力を役員・会員の皆様をお願い申し上げて、この稿をとじたいと思います。



パキスタンからドイツへ

栗原 道平



新潟日独協会は、1977年設立の新潟市内でも古い歴史を有する国際交流団体です。私は、2013年5月から専務理事を務めさせていただいておりますが、15年余り会員として関わって参りました。私とドイツとの出会いについて思い起こしてみたいと思います。

1992年11月末に新潟市へUターンしましたが、1979年大学を卒業後、三井物産株式会社に入社し、東京大手町の本店で勤務しておりました。1986年5月のとある日、突然パキスタン回教共和国カラチ事務所勤務を命じられ、それから半年後に赴任し1990年7月まで同地に駐在しました。私の赴任から3ヶ月後には妻と二人（一人は生後9ヶ月の乳飲み子）の子供達も合流し、家族4人で駐在員生活の苦楽を共にしました。元々海外に出て仕事をしてみたいという思いがあり、6大総合商社の入社試験をかたっぱしから受験しましたが、第一希望の三井物産に入社することが叶い、機械部門に配属となり、輸入農業機械などを担当していました。パキスタンとは、業務上何の繋がりも無く、なんで自分がカラチに赴任しなくてはならないのか甚だ疑問の上、やりかけのプロジェクトもあって激しい心の葛藤がありましたが、海外で仕事がしたいという入社時の初心に基づき、異動の辞令を拝命することにしました。（東京の大きな書店や専門書店を訪

ね歩きましたが、当時パキスタンという国に関する書籍は、ほとんどありませんでした。）

1986年11月29日17:40に成田空港を出発するルフトハンザ・ドイツ航空LH643便カラチ経由ミュンヘン、フランクフルト行に搭乗しました。機材はDC10、ルフトハンザ機は、今でもそれぞれの機体にドイツの都市名が名付けられ、市章が描かれていますが、私の搭乗したDC10はシュツットガルト号でした。かつてカラチは欧亜中継基地として、南回りの欧州便のほとんど総てが寄航していましたが、ペレストロイカでシベリア上空が開放されるようになったことにより、私が赴任する頃には南回りを撤退する航空会社が相次ぎ、10月にはスイス航空も撤退し、1986年11月に日本からカラチへ直路直行で飛んでいるのは日本航空とルフトハンザ航空だけになっていました。（パキスタン航空が北京、イスラマバード経由で運航していましたが、所要時間もかかる上、機内でお酒のサービスが無いので、日本人駐在員でパキスタン航空を利用する人は誰もいません。）日本航空はJL471便でしたが、バンコク、カラチ、バーレーン、ジェッダなどを経由して24時間以上かけて最終目的地がアテネという、途中帰航地が最多で最長のJAL国際線であったと思います。それに対してルフトハンザは成

田ーカラチはノンストップですが、大圏コースを飛ぶのではなく、中国の昆明上空などを經由し、ヒマラヤ山脈を迂回して11時間近くかかりました。(私のフライト・ログブックによると29日18:00成田を離陸、30日0:53にカラチに着陸とあります。時差が4時間ありますので、フライトは10時間53分要したことになります。)時節柄か機内はビジネスクラスに数名の乗客がいるだけで、エコノミークラスに至っては乗客がほとんど乗っておらず、ガラガラでした。

衛生状態や気候が過酷なカラチ駐在員とその家族には、年2回静養休暇を取得して海外へ出かけることが許されています。カラチからは欧州が7~8時間位と比較的近いので、酷暑となる6月と10月(カラチの四季は、3~6月のファーストサマー、7~9月のモンスーンサマー、10月~11月のセカンドサマー、12~2月の冬に分かれます。)に欧州で休暇を取る者が多かったです。もっとも欧米人は6月にインターナショナルスクールが夏休みに入るや否や9月まで、3ヶ月以上休暇を取るのが当たり前でした。私も初めての静養休暇で1987年6月にスイス(チューリヒIN、ジュネーブOUT)、ロンドン、パリを2週間半旅しました。(それまで欧州へ行ったことが無かったので、当時の日本人の定番のようなそんなコースとなりました。)長男がまだベビーバギーが必要なよちよち歩きだったので、2回目からはレンタカーで欧州を回るようにしました。そして、2回目の静養休暇が私にとって初めてのドイツ訪問となりましたが、それは1987年10月7日のことです。ちょうどこの日にルフトハンザがフランクフルト

ーカラチーカトマンズ線の新規運航を開始したのですが、その処女運航便の帰りの便にカラチから搭乗しました。乗客はほとんど乗っておらず、栗原家でDC10を貸切したかのようなようです。そして、さらに嬉しいことに客室乗務員は、成田ーカラチ(ここで乗務員は交代)便の乗務の後に、カラチステイとなっていた日本人客室乗務員が数名乗務しており、マン・トゥ・マンのサービスを家族で満喫しました。また、余談ですが、この頃には東ドイツのインターフルークがベルリンーカラチ線を運航しており、インターフルーク機(IL62)とルフトハンザ機(DC10)が昼間のカラチ空港で翼を並べるといふ珍しい光景を目にすることができました。残念ながら国防上、警備上の観点からカラチ空港は撮影禁止となっていたので、貴重な写真をフィルムに収めることはできなかったのが悔やまれます。(自動小銃を構えた兵隊や私服の警官が大勢監視しているので、隠し撮りは危険です。見つかるとカメラは没収されかねません。)

初めてのドイツ旅行は、シュツットガルトを起点にレンタカーで黒い森へ向かい、バーデンバーデンからシュヴァルツヴァルト・ホッホシュトラッセを走り、フロイデンシュタット、さらにフライブルク等を回り、東へ針路を変えてドナウエッシンゲン、南下して一旦国境を越えてスイスに入り、シャフハウゼン、シュタイン・アム・ラインを経て二度目となるチューリヒに滞在、アッペンツェルに泊まってから、オーストリアのインスブルックまで行き、ドイツへ戻りました。フィッセンからロマンチック街道を北上し、ネルトリンゲン、ディンケルス

ビュールに立寄り、ローテンブルクで2泊、最後はニュルンベルクに泊まり、10月22日にカラチへ戻りました。(大空港はレンタカーをチェックアウト、返却するのに時間がかかりますので、小さな空港を使った方が効率的なのです。)車はBMW730i、ルフトハンザのカラチ支店スタッフ(パキスタン人)は、いろいろと悪知恵?の働く男で、レンタカーを予約する際には、メルセデスのCクラスを指定して、ルーフキャリア、オートマチックトランスミッションなどの条件を付けて予約することを薦めます。この2条件を満たす車は事実上ほとんど無いので、結局グレードアップした車が用意されるという訳です。欧州では、レンタカーはドイツで1週間単位で借りるのが今でも一番お得なのではないかと思えます。この後の静養休暇では、ロンドンやアムステルダムでもレンタカーのお世話になりましたが、ドイツほど程度の良い車を安く借りることはできませんでした。1990年3~4月の最後の静養休暇では、ミュンヘンでほぼ新車のメルセデスのSクラスを運転する機会にも恵まれました。(勿論、予約上はCクラスです。)

この初めてのドイツ旅行

でドイツが本当に好きになりました。どんな田舎の安宿でも、上質なシーツに羽毛布団が当たり前、トイレは清潔この上なく、水回りは極めて快適です。(当時のイギリスだとお湯が出なくなったり

することが多かったです。)また、子供を連れていても料金を取らなかったり、朝食代として5マルク程度を払えば良かったりと、家族旅行にやさしい国であるという印象を強くしましたし、物価も安いと感じました。無料のアウトバーンのドライブは快適この上ないですが、ドイツの田舎道は本当に絵のように美しい。それに比べると日本の道路景観は醜いものです。田舎道の制限速度が100km/hというのも驚きでした。小さな村のGasthausは、村で唯一の食堂・居酒屋を兼ねていることも多く、夜8時を回る頃になると男達が集まりはじめ、ビールジョッキを傾けながら世相を活発に談論しているのも印象に残りました。勿論、ドイツ語の会話内容はほとんどまったく分かりませんが。現在のようにインターネットも無いので、最初のホテル以外は予約することもなく、陽が傾く前にZimmer Freiと看板を出している居心地の良さそうなGasthausかPensionを



黒い森からロマンチック街道、ローテンブルク。最後はニュルンベルク空港までドライブ(1987年10月)

見つけては投宿し、お天気とも相談しながら1日に100～200km程移動することを繰り返すのが我が家の欧州旅行スタイルでした。

また、このような旅行をしたいという思いはありますが、家族も減ってしまった今では、ひとりではレンタカー代のコストが高くつきますし、なかなか機会がありません。それでも、2015年6～7月に25年ぶりにドイツでレンタカーを借りて、3人でミュンヘンからスロヴェニアまで南下してから、北イタリアを通過し、世界最高の絶景山岳道路－オーストリアのグロスグロックナー・ホッホアルペンシュトラッセを走破し、ザルツカンマーグートをドライブ。ドイツに戻り、未だ外国人観光客はほとんど見かけないチェコ国境沿いに広がるバイエルンの森をドライブし、マイセン、ドレスデ

ンまで行きました。EUによる統合が進んだ結果、道路整備の水準も各国で平準化してきていることを実感しました。1990年当時の各国の道路事情はGDPに比例していたものです。勿論、経済大国ドイツ（当時は西ドイツ）は欧州で最も道路が整備されていたことは言うまでもありません。

紙幅が無くなってきたようです。最後に私とドイツの不思議なご縁を披露させていただきます。日本とドイツが国交樹立したのは、1861年1月24日（当時はプロイセン）で、私の誕生日と同じ日です。ちなみにルフトハンザ航空が日本へ就航したのは1961年1月24日（国交樹立百周年記念日）です。身長も180cmとドイツ人男子の平均とほぼ同じです。そんな訳で、これからもドイツとの関わりを深めて行きたいと願っています。

西に向けた窓

坂井 康一



私のドイツとの本格的邂逅は、世の中の多くの人と同様、大学の第2外国語である。もう40年以上も前になるが、当時、第2外国語といえばドイツ語かフランス語とほぼ相場が決まっており、ドイツ語の辞書は木村・相良かシンチンゲルだった。さすがに昨今は中国語や韓国語が全盛で、ドイツ語人気は残念ながら相当萎んでいるようだ。

大学のドイツ語の先生は、かなりの年配に見える方で、子供の年齢のような

我々に親しく冗談も言い、結構楽しい授業をしてくれた。たまに赤ら顔で現れ、授業の前に軽くひっかけて来るとの噂もあった。まさかとは思ったが、確かにそういうときはとりわけ弁舌が爽やかになる。ある日、いきなり黒板に3行にも亘る長文を書き出し、この意味が分かるかと聞いてきた。教室内がざわつく中で、先生がにんまりとして言うには、これはドイツ語でいちばん長い回文（Palindrome：No lemon, No melonのよ

うなシンメトリーの文章)で、特に意味のない単なる言葉遊びだそう。これは回文ならぬ怪文だと思ふ反面、世の中には暇なことを考える人がいるものだと妙に感心した。

あの頃使っていたドイツ語の教科書は鶯色のカバーで、先生は「これはモーゼルの緑だ」と得意げに紹介していた。ドイツワインは生産する地域によって、ボトルの形、色が異なっており、緑色はモーゼル地方の象徴だという。尤も、このところフランス、イタリアさらには新大陸のワインに押されて、ちょっと影が薄い。どうも甘ったるい白ワインしかないと思われるからだろうか。しかし、同じリースリングでも、産地やブドウの摘取り時期で全く味わいが異なる。そして、それを厳密に管理するため、昔から各ボトルにナンバリングが施されていることは、ドイツ人の几帳面さの表れとしてよく知られている。最近では、赤ワインも少なからず造られているそうで、今後の復権を期待したい。

さて、教養でそれなりに勉強させられたドイツ語ではあるが、学部の授業ではほとんどお世話にならなかった。もともと日本の法律は明治時代にドイツやフランスに学んでつくられたものが多いが、授業では、せいぜい国法学や刑法で幾つかドイツ語の単語が登場してくる程度だった。それは、医学や経済学でも既に同じような状況だったかも知れない。

さらに、ドイツ語を選んだ理由を振り返ると、大きかったのはやはり音楽である。まず、クラシックの分野では何とんでもベートーベンの第9があり、また、シューベルトの沢山の歌曲も魅力的であった。とりわけ魔王やセレナーデは、

曲の構成としてもメロディーとしても秀逸である。

また、私が子供のころから大ファンであるビートルズの作品の中に「Sie Liebt Dich」と「Komm, Gib Mir Deine Hand」というドイツ語で録音した曲がある。リバプール出身の彼らは、本格デビューの前にドイツのハンブルクに2回修行に行き、そこで腕を磨いた。その恩義もあつてのドイツ語録音とも思われるが、正直なところ、あまり気乗りしない演奏に聞こえる。しかし、よく知られているとおり、この2曲の原曲がブリティッシュインベージョンの先駆けとなった。アメリカ進出の伏線となる最初の海外展開は、ほかならぬドイツだったわけだ。

社会人になって数年経った頃、誘われてドイツに関係する芝居を見に行つたことがある。正確なタイトルは忘れてしまったが、確か「僕のリリー・マルレーン」という芝居だったと思う。リリー・マルレーンという歌は、アメリカに亡命したドイツ人のマレーネ・ディートリヒの持ち歌として知られているが、さきの大戦中に戦場で流され、ドイツ兵はもとより、相手の連合軍側もその放送を心待ちにしたというエピソードが語り継がれている。

今もその歌が流れると、時間も空間も飛び越えて、その頃に舞い戻つたような気になる。遠い恋人に思いを寄せるありふれたラブソングながらも、実は、静かに平和を希求している力強いメッセージソングに聞こえるのは私だけだろうか。

ドイツと日本はともに敗戦国でありながら、いずれもその後、目を見張る復興を遂げて経済大国になった。最近では、自国優先主義が洋の東西を問わず広がりつ

つあり、自由、民主主義、基本的人権、法の支配、市場経済などの普遍的価値を共有する国は、日本と西欧の一部に狭まってきている。そうであればこそ、日本とドイツは似た者同士として、さらに友好と相互理解を深め、世界的諸課題に連携協力して対処していくことが求められる。

しかしながら、子細に見ると両国は様々な面で違いがある。まず、ドイツは連邦国家であり、地方分権の限界に直面する日本とは成り立ちからして異なる。最近では、環境先進国として脱原発や再生エネルギーにも力を入れている。ヨーロッパを席卷したイスラム諸国からの難民問題についても、人道主義の観点から国の隅々に至るまで積極的に受け入れている。産業面でも、Industry4.0としてIoTやコネクティドインダストリーを意欲的に進めるとともに、巨大コンベンション施設を武器に地球規模でビジネスを引き寄せている。

加えて、日本では働き方改革がなかなか進まないが、ドイツは、休暇大国でありながら労働生産性も極めて高く、ワークライフバランスも日本の相当先を行っている。ことほど左様に、昨今はドイツの隆盛が際立っている。日本がバブル崩壊以降、30年近い停滞から抜け出せていないこととは対照的である。もちろん、ドイツ自体もいろいろな課題を有するが、まだまだ日本がドイツに学ぶべきことは多い。

リバプールやハンブル

クと同様、新潟も西海岸にある港町である。しかし、これらに比べると、新潟は知名度で大きく見劣りしている。また、様々な変遷があったものの、バブル崩壊以降はずっと「Im Westen nichts Neues (西部戦線異状なし)」とでも云うべき閉塞感が漂い続けている。他方、仙台、金沢、富山などもともと港町でない都市が、近年、追い風をうまく捉え、国内のみならず海外に向けても大きく羽ばたいている。周知のとおり、開港5港の一つでありながら事実上ほとんど外国船が立ち寄らなかった新潟港にあって、ドイツの領事館は13年間も存在した。残念ながら、地理的な距離もあり、現在、新潟とドイツとの関係は他に比べ濃密とはいいがたい。このたびの開港150周年事業やドイツ領事館記念碑建立をきっかけにドイツとのつながりを思い出し、再び新潟が外に向けて大きく窓を開き、本来の港町そして国際都市となっていくことを願わずにはいられない。



学生時代に使っていたシンチンゲルの独和辞典と木村・相良の和独辞典。それほど勉強に没頭した記憶はありませんが、有名なリートをなぞりながらドイツ語でロマンを追っていたのでしょうか。私の「緑の時代」です。Those were the days.

忘れられない人たち

渡辺 隆



東京の大学でドイツ語を学習し、ドイツ文学を学んだものの、いろいろな事情があって東京とドイツとも縁を切るような気持ちで故郷に帰ってきた。地方新聞社に勤め、その大半を編集畑で過ごしてきた。「ドイツ語より日本語」で、気ぜわしい生活を送り引退した。金とヒマはなかったが、新婚旅行も含めてドイツを数回訪れているのだから、過労死が社会問題化している今に比べれば、どこかラフで余裕もあったというべきなのだろう。

振り返れば落第しないために必死に辞書を引いていた学生時代が思い出される。新聞記者生活を続けながらも、どこか心の底でドイツでの生活を望んでいた気もしないではない。新潟日独協会は私

が入社した翌年に創立された。勤め始めて間もなく、協会の礎を築いた新発田市のノツオン神父と会う機会があり「学生時代に勉強したことは大事に下さい」と言われた。耳の痛い話ではある。それで協会に入った。しかし当時のアカデミックな協会はどうも場違いのような気がしてならなかった。

会費の納入をときどき忘れた不良会員ながら、結果として協会では古株となってしまう、いまは会長。人生は分からないものだ。記念冊子に稿を寄せるにあたってドイツとの縁をつなぐかのように、さまざまな人にお世話になり、励まされてきたことについて考えた。ノツオン神父もその一人だが、別の項で3人に絞って紹介したい。

望郷の念を抱きながら

真壁 祿郎氏

新潟市の沼垂地区に生まれた。「沼垂もん」では私にとって大先輩になる。新潟大学医学部から初の DAAD（ドイツ学術交流会）の留学生に選ばれドイツに渡った。フランクフルト大学の眼科で学んだ。そして、小児科医を志していたドイツ人女性と結婚した。

これが大きな転機だった。将来を嘱望され、新潟に戻ってからの活躍が期待されていたにもかかわらず、ドイツに残ることを決断した。新潟に帰郷しても新大を訪れるのははばかられたという。故郷新潟への望郷の念は察するに余りあるものがある。元「新潟いのちの電話理事長」で新大医療技術短期大学部でドイツ語を教えた弟の真壁伍郎氏と、互いの近況などを日本語でテープに吹き込み、カセットの郵送でのやりとりを続けた。日本語、新潟弁を懐かしんだ。

私も個人的な思い出がある。私の伯父が新大医学部で禄郎氏と同じように眼科医で、DAADでドイツに留学したことがある。伍郎氏の紹介もあって新婚旅行でフランクフルトの禄郎氏を訪ねた。大学を案内してくれた後、市内で夕食をごちそうしてくれた。新潟から来た「沼垂もん」との日本語の会話が本当に楽しそうだった。その様子は今も目に浮かぶ。

ドイツ国籍に関する法令の関係で禄郎氏は結婚の届けは新潟市役所で済ませた。当時は日本人男性がドイツ人女性と結婚し、ドイツで住むケースは多くなかった。ドイツ国籍を取るのは後年のことである。フランクフルト大学の教授に推挙され、その条件として国籍が必要だったためだ。

2012年、81歳で亡くなった。亡くなる前によく聞いていたのは「赤とんぼ」など日本の童謡などだったという。葬儀には渡独してからの友人で1994年にノーベル経済学賞を受けたラインハルト・ゼルテン教授が弔辞を述べた。フランクフルト大学はフランクフルター・アルゲマイネ紙の全国版に異例の大きさの死亡広告を掲載した。その要旨を引く。「彼は日の昇る国からきた。留学生としてきて、助手としてここにとどまり、眼科教室の医長となり、退官するまでの20年以上、眼科機能とレーザー治療に当たってきた。レーザーは光である。真壁氏は多くの光を失った人に光を回復させた。東方からの光で…」。ドイツ政府からは日独交流への貢献で表彰された。

禄郎氏は3男2女をもうけた。5人ともドイツで暮らす。それぞれドイツ人と結婚した。新潟での日独交流で忘れられない人であり、その一家、一族である。



日独交流の貢献でドイツ政府から表彰を受けたときの真壁氏（2008年2月、ヴァイスバーデン）

雪国の暮らしを独訳、そして英訳

ローゼ・レッサさん

雪国の厳しい暮らしを描いた鈴木牧之の名著「北越雪譜」に出合ったのは学生時代だ。注釈を参照しながら、なんとか読み通した。「おまえは新潟出身だろう。北越雪譜のところだな」と大学時代の友人に言われたのがきっかけだった。それまでは知らなかったからだ。

その後勤めてから、この大著をドイツ人女性がドイツ語訳したことを知った。新聞にも報じられ、NHKなどでも取り上げられた。ローゼ・レッサさんで、ベルリンの裕福な商人の家庭に生まれ、1929年、21歳のときに単身で日本に来た。そして登山家としても知られる京大の植物生態学者高橋健治氏と結婚した。

日本を訪れたのは、「ラフカディオ・ハーンが描く不思議な国に行ってみたかった」といわれる。そしてローゼさんは日本の暮らしを描く本を書き続けていく。湯沢町の「高半旅館」（現高半ホテル）で、北越雪譜を手渡された。それが翻訳のきっかけとなる。川端康成が「雪国」を書き始めて、しばらくたったころだ。彼女の生涯に興味を持たれた方は、さまざまな資料があるので調べられる。



写真＝北越雪譜の独訳、英訳に対し当時の小野沢一吉・塩沢町長（現南魚沼市）から感謝状を受けるローゼさん（右）＝1991年5月4日（新潟日報社提供）

私は大学時代にドイツ語を勉強はしたものの、地方紙を就職先に選んだ時点でドイツは縁遠い世界になっていた。しかし、日本語で読みこなすのさえ難しい江戸期の本をドイツ女性がどう訳したのかは興味があった。仕事に追われているときに北越雪譜そのものも読み直すことはなかった。若いころを思い出しながら、ドイツ語にどう訳されたのかを確かめながら再読することを老後の楽しみの一つにしていた。

このドイツ語訳の本（題名 *Leben unter dem Schnee* = 「雪の下での暮らし」）を手にし、単語を検証しつつ、つまみ食いしている。北越雪譜冒頭の「地気雪と成る弁」の「凡（およそ）天より形を為して下す物。雨。雪。霰（あられ）。霰（みぞれ）。雹（ひょう）なり」では、どんな語彙が用いられているのか。

不出来な学生だったから、霰、霽、雹をドイツ語でどういえばとなると、辞書にすぐに頼ってしまう。はたしてドイツ人にそのように天から下るものを、細かく分けて表現する感性があるのかも否定的にみていた。霰 (Graupeln)、霽 (Schneeregen)、雹 (Hagel) はちゃんと辞書に掲載されていた。不勉強を恥じるのみであり、かの国ドイツも寒冷の地なのだと思いついた。

もっとも霽は直訳すれば「雪雨」で、妙な味わいがある。「雪吹 (ふぶき)」のところでの「花雪吹」は Blütenschneegestöber で「花」と「吹雪」をつなげただけにみえるが、雪の舞うように吹く様子が感じ取られる。よく翻訳に取り組んだものだと心を打たれる。そして、あらためて北越雪譜そのものにも魅了されている。

日本山岳会越後支部に所属する魚沼市の吉田理一さんは、ローゼさんのことを山の仲間の集まりで知って以来、関心を抱いて調べてきた。吉田さんは「21歳の若さで、まだ船便しかない時代に一カ月半もかけてなぜ日本に一人で来たのだろう。そのことにまず驚く。それと、戦前の北越雪譜は旧かなづかいのものしかなかった。それを高半で説明を受け、翻訳に取りかかっていたことに感動する」という。同じ思いを抱く人は少なくない。

夫の高橋氏は戦後まもなく44歳の若さで亡くなった。短い結婚生活だった。ローゼさんは2002年に93歳で死去した。遺言は「わたしに2本のバラを持たせてください。1本は健治のために、もう1本は私のために」だった。

稀覯本を集めた情熱

原田 新司氏

「私は車を持たない、ゴルフをしない、晩酌をしないを守ったからと答えています」。これは2017年1月に死去した新潟日報社の先輩である原田新司さんから、亡くなる一年半前にいただいた手紙のなかにあった一文だ。原田さんは3回にわたって母校新潟大学に、ドイツ書籍など計21点を寄贈している。内訳は書籍18点28冊（全集は1点に数える）、ゲーテ自筆書簡など3点だ。中には100万円を超えるものもある。初版本は8点を数える。そのお金はどこから出たのですか、とよく問われるので、冒頭の言葉を繰り返してきたという。

在社中、原田さんとドイツに関係する話をする機会はほとんどなかったし、そんな時間も無かった。仕事でのドイツとの縁はないにひとしい。聞くのものはばかれる大先輩だった。ただ、新潟日独協会の会長を務められた新大教授の野本祥治先生を取材する機会があって、教え子である原田さんの学生時代のことを話題にした覚えがある。聞いた話の内容は今はおぼろだが、優秀な学生だったと聞き、我が身と比べてしまった記憶はある。

原田さんは長岡空襲で祖母、両親、妹4人を亡くし、一人だけ残された。

空襲時は旧制長岡中学3年で校舎の警防要員として学校の消火に当たり、翌朝帰宅して惨状を目の当たりにした。退社後は「空襲の語り部」として平和の大切さを精力的に訴えた。新大のドイツ関連書籍は「原田文庫」といわれる。ほかにも「原田文庫」がある。それは長岡市の「長岡戦災資料館」に寄贈されたもので、戦争関連書籍やスクラップなどからなる。

新大の「原田文庫」について付属図書館報に桑原聡教授が解説を加えている。その中で「原田文庫で特筆すべき点は『若きヴェルターの悩み』の初版、改訂第二版、完成版の三版の三つがすべてそろっていることで、多くのことを知ることができる」と指摘している。改訂第二版には「真性第二版」という言葉も使われ、当時人気のあった「ヴェルター」には海賊版が多く出回ったことを示している。さらに「ファウスト断片」の初版本(ライプチヒ・ゲシェン書房、1790年)の稀覯(きこう)本の価値も極めて高いという。文庫といっても1700、1800年代のものである。閲覧の対象ではなく展示用だ。図書館の書庫にふだんは眠っている。文庫サイズで小さいが、めくるのははばかられる。管理する図書館の気遣いが伝わってきた。

神田の古書店などを回り、ボーナスのほとんどをつぎ込んだという。それを惜しみなく寄贈していった。何が原田さんを駆り立てたのか。「本が好きだった」だけではないはずだ。非戦への強い思いがあったことはよく分かる。それだけでなく私はもっと聞いておくことがあったと今悔やんでいる。私には「原田文庫」と、原田さんが旧制高校時代に机を並べた野坂昭如氏の「火垂るの墓」が重なって見えてくる。



原田氏が集めたゲーテ自筆書簡と稀覯本。新潟大学の付属図書館に大切に保管されている